

文学部の試み

—まほろば叢書『ジェンダーで読む物語』ができるまで、とその後—

附：企画参加学生座談会

高岡 尚子・野村 鮎子

本稿の構成：

1. まほろば叢書について
2. ジェンダー言語文化学プロジェクト
3. 「演習」から「まほろば叢書」へ
4. 第1回リカレント教育講座について
5. 企画参加学生座談会

1. まほろば叢書について

奈良女子大学文学部は、2012年3月、文学部の研究成果を公表する図書として、まほろば叢書の第一巻『大学の現場で震災を考える』を創刊して以来、これまでに以下の書籍を上梓してきた。

1. 三野博司編著『大学の現場で震災を考える—文学部の試み—』2012年
2. 浜田寿美男・麻生武編著『現場の心理学』2012年
3. 吉田孝夫著『語りべのドイツ児童文学—O・プロイスラーを読む—』2013年
4. 小川伸彦、水垣源太郎編『ベネディクト・アンダーソン奈良女子大学講義』2014年
5. 鈴木広光編著『「徒然草」ゼミナール』2014年
6. 鈴木康史編著『和合亮一が語る福島—講演会・インタビューと奈良女子大生の福島訪問記—』2015年
7. 齊藤美和編著『イギリスの詩を読む—ミューズの奏でる寓意・伝説・神話の世界—』2016年
8. 柳澤有吾著『パブリックアートの現在—屋外彫刻からアートプロジェクトまで—』2017年
9. 山辺規子編著『甘葛煎再現プロジェクト—よみがえる古代の甘味料—』2018年
10. 高岡尚子編著『ジェンダーで読む物語—赤ずきんから桜庭一樹まで—』2019年

先にまほろば叢書は研究成果を公表する図書である書いたが、これは単に教員による閉じられた個人による研究の出版を意味するのではない。まほろば叢書刊行当時の三野博司文学部長の発刊の辞には、次のような一節がある。

いにしえより国の〈まほろば〉であった古都奈良の学府から、私たちは新しい声をあげたいと思う。人間のいとなみとその歴史について、また社会と言語にかかわる事象をめぐる、私たちはたゆみない考究と思索の実践、その交換と伝授につとめてきた。(傍点 筆者)

人文学の研究は、自らの思索を人との語らいの中で深めていくものであり、教員は知の伝授者であると同時に、知の交換のすぐれた媒介者であることが求められよう。

そのため、これまでに公刊されたまほろば叢書のほとんどは、個人の研究というよりも教員の教育実践、学生の学びの場から生まれたものである。特に、「編著」とある巻は、学生のゼミ活動の記録、もしくは授業レポートや自主活動の記録をまとめたものである。学部生や大学院生が何らかの形で関わっていない巻はないと言ってよい。

ここで紹介するまほろば叢書の最新刊『ジェンダーで読む物語』もまた授業、あるいは自主ゼミの学生同士の対話の中から生まれたものである。(野村)

2. ジェンダー言語文化学プロジェクト

文学部内にはみつつの研究プロジェクトがあるが、そのうちジェンダー言語文化学プロジェクトは言語文化学科を中心とするプロジェクトである。このプロジェクトでは、毎年、学内のセンター機関と共同で講

演会やシンポジウムなどを行い、ジェンダー研究を推進している。また、文学部のプロジェクトの特徴は授業カリキュラムと一体化していることで、本プロジェクトでは教育に関する取り組みとして、平成17年以降、ジェンダー言語文化学関連科目を複数開講している。

このうち、ジェンダー概念の基礎知識と言語や文学におけるジェンダーの問題について講義する「ジェンダー言語文化学概論」では、テキストとして、言語文化学科が主体となって出版した『恋をする、とはどういうことか?』（ひつじ書房、2014年刊行）を使用している。本書の編集には、教員グループの研究は学生の学修とともにあるという意識も強く反映されており、単に、ジェンダーと言語文化に関する知識の整理に留まらず、学科教員がそれぞれの専門分野の立場から、さまざまな文学作品・文化事象についての「ジェンダー的分析」を試みている。

「概論」の次のステップとして開講されているのが、「ジェンダー言語文化学演習」である。「演習」は、言語文化を題材として扱う授業の中で特に重要な位置を占めるが、それは、受講している学生自身が作品（文字テキストだけでなく、図版や映像作品なども含まれる）を精読し、独自の分析や解釈を導き出す実践の場であるからだ。もちろん、ジェンダー概念を用いた批評の方法や、各作品の分析・解釈を支えてきた先行研究への目配りは欠かせないが、この授業の醍醐味は、なんといっても、受講生が小さなグループを組んで行うディスカッションに尽きるだろう。

授業で用いる作品には、それぞれ、ジェンダーの観点からして重要な問題が多様な形で表現されている。性別や、性役割、性自認、性的指向といった、きわめて複雑かつ複層的な問題について、受講生が意見を交換し、知識と分析力を高めていくことが、この授業の目標とするところである。（高岡）

3. 「演習」から「まほろば叢書」刊行へ

ここに紹介する『ジェンダーで読む物語—赤ずきんから桜庭一樹まで—』は、「演習の抄録」のようなものだと言ってよい。

授業では毎年、映画化されているプリンセスストーリー（「シンデレラ」や「美女と野獣」など）、「赤ずきん」のほか、受講生たちが投票で選んだ小説作品をふた

つ扱い、それぞれの作品ごとに、約3回のグループディスカッションを行っている。本書の元になった2017年度の演習では、「人魚姫」「赤ずきん」に加えて、受講生たちが投票で選んだ西加奈子の『きりこについて』と、桜庭一樹の『青年のための読書クラブ』について、グループディスカッションを行った。

当該年度の受講生たちには、初回の授業時において、この演習を抄録する形で「まほろば叢書」を刊行したいという、授業担当教員の意味を明確に伝え、この企画への賛同を確認するとともに、授業期間が終了した後も、刊行に向けて議論を重ねてほしいむねの希望を伝えた。その結果、16名の受講者のうち半数の8名が出版企画への参加を希望し、自主ゼミのような形でのディスカッションを、ほぼ、半年にわたって継続することになった。参加してくれた学生たちの氏名は、『ジェンダーで読む物語—赤ずきんから桜庭一樹まで—』内に明記している。

最後に、なぜこの「演習」を書物の形にしようと考えたかについて述べておきたい。

ひとつめに、文学テキスト（とそれにまつわる文化的事象）を「ジェンダー」視点で読むことの実践の形をわかりやすく伝えたいと考えたことと、この活動が非常に刺激的であり、時には、社会や物の見方を大きく変える原動力になるのだということを、書物を通じて経験する場を設けたいと考えたためである。

ふたつめに、学生たちが相互に影響しあうことで作り上げられていく分析や解釈の深まりを「追体験」することで、まるで授業に参加しているかのような「ライブ」感を持ってもらえるのではないかと考えたためである。それによって、「ジェンダー」で「物語」を読むという行為は、どこにいたってできるのだ（たとえば大学や高校、またそれ以外の場所でも）という手ごたえを感じてもらえれば、新しい学び（や、さらには研究）の形が開けていくのではないかと期待したためである。

みつめに、この授業を担当する教員として、学生たちの探究能力の深まりと進化に、心底驚かされたことをあげておきたい。ひとりでレポートを読むのは、あまりにも、もったいない、と。（高岡）

4. 第1回リカレント教育講座について

さて、まほろば叢書『ジェンダーで読む物語』のその

後である。

本書が刊行された後、関係者の間から、こうした「ジェンダー」で「物語」を読むという学びの経験を多くの人に伝えたい、グループディスカッションによって得られる学びの楽しさを学外の方にも体験してほしいという声があがった。

おりしもこれまで文学部主催で行ってきた年2回の公開講座のうち、1回分を試験的にリカレント教育講座として開催することになり、第一回目のテーマを「ジェンダーで読む物語」にすることが決まった。

リカレント教育とは、人は年齢や時期に関わらず生涯を通して学ぶことができるという考えのもとづいて、教育機関が広く社会人を受け入れるものである。近年、とくに人生100年時代における女性の「学び直し」が謳われているが、いったん学校教育を終えて就職した社会人女性や家庭の主婦が大学で学ぶ機会はまだまだ少ないのが現状である。

初めての試みということもあり、初回のリカレント教育講座は、奈良女子大学生の女性保護者または女性ご家族の方のみを対象に限定する形で、6月15日（土）の午後に開催した。時間は2時間半と、通常の公開講座の2倍とし、一時限目は高岡教授によるジェンダーと文学に関する講義、二時限目は5名ずつのグループに分かれて、ディスカッションを行うという授業形態にした。この形態にしたのには、学生たちの学びを「追体験」してもらおうという意図もあった。

ディスカッションの素材として取り上げたのは、『ジェンダーで読む物語』にも収録した誰もが知っている「赤ずきん」の話である。

「ジェンダー」という言葉は、近年は新聞等でもよく見られるようになったが、受講生達が学生だった頃は、学校教育の中で取り上げられることはほとんどなく、ましてジェンダーの視点から文学を読み解いた経験もないという方がほとんどであった。しかし、グループディスカッションが始まるや、受講生達は、ペロー版「赤ずきん」とグリム童話版の「赤ずきん」の違いやそこに現れたジェンダー規範などについて自らの意見を積極的に述べ、互いの意見を聴いた上で、さらに議論を深めていった。

受講生によるアンケートには、「受け身でなく積極的に参加できる講座で、グループ別の発表ではたくさんの意見をきいて気付くことができた」、「「赤ずきん」

を母親の立場で読み、楽しかった」、「娘も、いつもこんな感じで勉強しているのだと、わかって良かった」、「ただ講座を聞いているだけでなく、ディスカッション形式で普段はない体験が知らない方とできてよかった」、「とても充実した時間でした。参加されていた同世代の皆様と同じテーマについて話し合え、有意義で楽しかった」、「学問は何歳になっても楽しい」、「また機会があったら参加したい」といった声が多く寄せられた。

見知らぬ者同士のグループでありながら、ディスカッションがこれほどスムーズに行われたことの背景には、この講座の運営に、まほろば叢書『ジェンダーで読む物語』の出版に参加した学生6名がチューター役として参画してくれたことが大きかった。学生達の巧みなリードで、ディスカッションしやすい雰囲気が生まれたといっても過言ではない。

このときの学生側の感想については、次章の企画参加学生座談会を参照されたい。（野村）



6月15日開催リカレント教育講座のゼミの様子

5. 企画参加学生座談会

まほろば叢書『ジェンダーで読む物語』の出版に参画し、その後のリカレント教育講座でもチューターを務めてくれた学生に呼びかけ、座談会を開催した。以下はその記録である。

開催日：2019年11月8日（金）16時半～18時

司 会：野村鮎子 高岡尚子

参加者：上杉綾乃（人文社会学科4回生）

野田ゆうき（人文社会学科4回生）

三浦実加（言語文化学科4回生）

司会者：この企画は、授業（ジェンダー言語文化学演習）から始まりました。授業で本を出版する計画に

ついて話をしましたが、この企画に参加しようと考えた理由はどのようなものでしたか？

上杉綾乃さん（以下、上杉）：ジェンダーの授業での議論が楽しかったので、もっとみんなと話し合いたいと思ったから、っていうのが一番メインの理由です。奈良女子大学はジェンダーの授業がよその大学より多いと思っているので、それだけジェンダーについても自分の考えを持っている人がたくさんいると、私は思っています。そういう人たちと意見交換できる場は貴重なので、ぜひにと思い参加しました。



左から：野田ゆうきさん、上杉綾乃さん、三浦実加さん

野村鮎子（以下、野村）：奈良女子大学は他の大学に比べて、ジェンダーに関する授業が多いと感じますか？

上杉：高校生の時の同級生で、よその大学に通っている友達と話してて、奈良女はジェンダーの授業多いよねっっていう話になったことがあります。特に具体的な数字は聞いたことがないのですが、印象として多いと思います。

野田ゆうきさん（以下、野田）：私は授業自体が楽しかったというのもありますし、そもそも「本を出す」という経験がこの先の人生であるかどうか分からないほどのビッグイベントだったので、こんな企画に参加しない理由がないな、というのが参加の理由ですね。

三浦実加さん（以下、三浦）：一番は、授業内容を本にまとめて出版するのが面白そうだと思って。こういう経験はあまりできないです。大学でジェンダーに関する授業を受講する中で、世の中であたり前だと思っていることの中にジェンダーの問題があることに気付くようになり、それについてもっと勉強したいと思いました。

野村：高校のときにはなかった視点ですか？

三浦：ジェンダーという言葉はありましたが、社会の科目の単語ぐらいの印象しかなくて。

司会者：授業後、各作品について、何度か勉強会（自主ゼミ）をしました。議論の途中で、悩んだことや困ったことなどありましたか？

野田：勉強会に関しては、意見がぼんぼん出てくるので、行き詰まるようなことは少なかったです。ただ、授業が終わってから勉強会まで少し期間があったので、赤ずきんのペロー版とグリム版の違いとかは結構忘れていて困りました。私の記憶力の問題ですね（笑）。

三浦：勉強会で困ったことは、特になかったんですけど、内容に関してだと『きりこ』（注：本書で扱っている小説作品のひとつ。西加奈子『きりこについて』）の「ちせちゃん」（注：同作品の登場人物。レイプ被害者として描かれる）の話のあたりが少しきつい内容でした。『きりこ』の物語全体については、自分たちの生活に一番近い話だなと思ったんですけど、ちせちゃんのレイプについては、ちょっと考えるのは、つらいなって思ったのはありました。

上杉：私は、困ったことというか、私たちは当たり前のようにジェンダーを知っていて、ジェンダーに対する自分の考えも持って話し合っているけれど、それを本にするとなったとき、ジェンダーにあまり触れたことない人にもわかってもらえるのかな？っていうか…。私たちが疑問に思ったりとか引っかけたりしたこと、例えばさっき三浦さんも言ってましたけど、ちせちゃんの話。私たちはちせちゃんの話に対してちせちゃんの言い分、「私は自分の体のことを一番に考えてるから自分の欲求に従う。したいときにして、したくないときにはしないって決める」とっていうのをわからないでもないな、っていう気持ちで考えることができるけど、読者にとってはどうなんでしょう？男の人と二人きりになった時点でOKしてるようなもんだよ、とか、そんな露出度の高い服装してたらそれはもう襲われても仕方ないよ、とか。そういう意見があると思うんですよね。だからそのズレというか…。私たちが引っかけたところを、他の人もわかってもらえるかなっっていうのはちょっと思っていました。

野村：それは、授業をしていても直面する問題ですね。世間の常識を学生自身が内面化していて、ジェン

ダーの観点で話をすると、自分の価値観を傷つけられるように思う学生もいる。今まで持っていた価値観を、否定されるような気がするのかもしれない。

三浦：私の場合、ちせちゃんのところで自分がしんどくなったなと思ったのは、作品の中で、ちせちゃんに対して「露出してるから誘ってるのと一緒に」っていう人が出てきて、そういう言説が、実際あるなと気付いたときですね。

高岡尚子：野田さんはジェンダーについてみんなで語り合うことについて、全然平気でしたか？

野田：うーん、苦しかったり、価値観が揺らぐことこそが勉強だと思っています。そういう意味で勉強は刺激的です。それを痛いと思ったり、怖いと思ってしまうと、授業から離れていくような形になるのかもしれないですね。

司会者：勉強会を続ける中で、自分にとって新しい発見や経験がありましたか？

三浦：勉強会でやることは、全部が新しい発見だなという感じがありました。さっきの話とちょっとつながりますが、世の中によくある言説、女の子はこうでないと、っていうのをちょっと立ち止まって考えてみる視点が持てたなと思って。これはジェンダーに限らず言えることになって思ったし。あとみんなで話すのは自分が全然注目してなかったこととかに気付かせてくれて、そこはすごく面白かったです。

上杉：私は『きりこについて』のとき、ブスと美人について考えたときのことで、私は自分の顔にすごくコンプレックスを感じていて、美人は絶対に得だ、美人に生まれてたら人生は絶対バラ色だぐらいに思っていたのですが、美人は美人で「この子は美人だから内面もいいんだろう」「美人だからなんでもできるんだろう」とかハードルをあげられて大変なんだろうと思いました。それこそ私が思ってる「美人だから絶対幸せなんだろう」も決めつけではないですし…。そういうのも、新しい発見でした。

野田：授業で一度検討したテーマなのに、ガンガン意見が出てくるので、まだまだ掘り下げ可能なテーマなんだと改めて確認できました。

野村：文学研究は、基本的には個人の研究だと思われがちですが、それについてどう思いますか？このように、複数で議論を積み重ねることは、ジェンダー研究の新しい方法論を提示しているように思います

が。

三浦：ジェンダーに関することは、自分の中にあたり前って刷り込まれちゃってることもあるので、自分だけで読んでも気付かない点もありますが、勉強会でしゃべると、自分が全然考えてなかったことを誰かが発言してくれて、そうすると、「あ、それは確かに、自分は全然気づいてなかったな」と思うことがあります。

野田：「ジェンダー」という分野自体が人それぞれの性について扱う学問なので、個人プレーで研究するべきものではないのかもしれないですね。

三浦：自分に直結する問題でもあるから、話しやすいっていうのもあるなって思います。自分だとなんて考えてやすいし、それで「じゃああなたは」って感じで。

司会者：出版に到るまでに、およそ一年半程度かかっていますが、この間の経験は、みなさんにとってどのようなものでしたか？

上杉：就活や卒論など、個人的に気の重い一年だったのですが、ジェンダーの勉強会のときはそういうことは忘れてみんなとの意見交換にだけ集中できて、あっ、そういう意見があったんだ！という発見があったりしてすごく楽しい時間でした。

三浦：二回生の後期の授業で触れた作品、テーマを長期間考えて行くことで、三回生で取った授業とか、結婚に関することの授業を受講した後で考えたりすると、勉強会で自分はあの時ああ発言したけど、ちょっと考えが変わったなということがありました。この本を読み返したら、私はこんな事言ってたんだってちょっと恥ずかしくなる。すごい考えていること変わってて。一年半、二年くらいで。

野田：一年半の間、同じテーマについて関わり続けるという経験が、これから先の人生の中でもあったらいいなと思いました。もちろん、卒業論文や仕事でその機会はあるとは思いますが、自分の中で完結することがほとんどで、成果物がこういう形で世に出るのは珍しいと思います。

司会者：リカレント教育講座でチューターとして活動し、自分たちとは異なる世代(主に、親の世代)の方たちに発信し、コミュニケーションをとる経験をしてもらいました。その際に感じたことを教えてください。

三浦：自分の親の世代だと、ジェンダーに関する考え

方が私たちとだいぶ違うのかなって思っていて、それまで生きてきた人生であった事とかで受け取ることとも違うから、どんな感じになるのかなって心配してたんですけど、授業で、問題にしたいところを、ディスカッションで話すと、自分たちがあれって思ったところを、同様にあれって思ってたことで、そこはこんなに世代が違っても気になる点、注目する点は一緒なんだなっていうのが驚きでした。あと「赤ずきん」を読んだときに、皆さんは赤ずきんちゃんのお母さんに注目して、「このお母さんの子育ては……」みたいな話をして、それは私たちじゃ出てこない見方だなと思って、すごく面白かったです。

上杉：三浦さんと共通しますが、自分達世代と親世代とでは着目する場所が違うということがすごく新鮮で、赤ずきんについて、私たちは赤ずきんの立場で考えていたけど、親世代の方々、お母さんたちは赤ずきんのお母さんの立場で考えてらして。すごく印象に残ったのが「そもそもなぜ赤ずきんを一人で森に送り出したのか」と言ってるのが、「確かに！」と、そこは私たち一度も疑問に思ったことのないところだったので、そこが母親とまだ母親でない私たちとは違うところだなあと新しい発見でした。

野田：世間一般で「教育を受ける」とされている期間を超えて学ぼうとする人はもれなく品があるんだなと思いました。受講された方たちを見たときに、感覚的に「品！」と思ったんです。みんな職業もばらばらで、プレゼンを生業としている人は一人もいないはずなのに、皆ハキハキと発表されていたのを見て、ああいう風に生きていきたいなと思いました。それ

から、上杉さんと三浦さんの意見とも共通しますが、やはり母親としての視点について、感じるところが大きかったです。経験してることが違うと、こんなにも見える世界が違うんだなと感じました。だからこそ、「話してください」というテーマがあれば、こんなにも知的な見解を披露できる人たちが、「話せない」社会だとすれば、それは大きな損失だと思います。

野村：年齢も異なり、住んでいる場所も違うひとたちが、譲り合いつつも積極的に討論されていたのが印象的でした。母親たちが集まる場所はあるでしょうが、そういう機会には、母親役割としてしか、お互いに話さない。女性には、知的な好奇心からディスカッションをするような機会が保障されていないのではないかと感じます。今回、その場を提供したことが、良いきっかけになったのではないかと思います。単なる座学ではなく、ディスカッションを含む「リカレント教育講座」にしたのが良かったのかもしれません。

司会者：みなさん、ありがとうございました。

